



～ 原 爆 の 記 憶 ～



[→ Memoirs of A-Bombed Hiroshima \(in English\)](#)

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚 Sirouo fish	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
-----------------------	----------------------------	------------------------------------	-------------------------	------------------------	-------------------------	------------------------

泳 ぐ 焼 き 魚

(Radioisotope News, 1983年4月号)

灰で縄を束ねる難題を老婆の知恵で切り抜ける話は、わが国や近隣諸国に古く伝えられている姥捨説話としてよく知られているが、ここに紹介する「泳ぐ焼き魚」とは、悪魔の知恵ともいべき実話なのである。

広島に原爆の落とされた翌日未明、山口県に接する大竹市の某工場で動員学徒として働いていた私たちは、工場の調達してくれた小舟で、広島市に残したそれぞれの家族を探しに戻った。

前日の午後、交通の途絶した広島からの負傷者の徒歩の群れが原爆 — とはまだわからなかったが — の惨禍をその焼けただれた身をもって伝えつつあったが、その数は増すばかりで、いずれも想像や理解を絶する情報に不安はつのる一方であり、工場や教官と協議した挙句に、海路広島に向かうことになったのである。

広島市を流れる太田川の澄んだ水は、七つの支流に分かれて海に注いでいる。早朝、舟が河口を上りはじめたころであった。舟べりを、背びれを失い、ウロコも半ば焼け落ちた魚 — たぶん大きめの鮎であったろう — が水面に漂っている。死んでいるのかと手を伸ばすとふらふらと泳ぎ去ってゆき、また漂う有様を、そのときはそのまま見過ごしたが、あとになって、この魚はおそらく水面近くで被爆したものだと思いついたのである。

行方不明であった母親は、五日後に重傷者の収容所で発見され、重傷で身動きできなかったことがかえって二次放射線障害を悪化させないで済んだのか、半年後には白血球も正常値に回復しはじめた。

そうして一息ついたころから、市内での惨状とは対照的に、朝の光をうけて透んだ水の流れてに身を任せて漂っていた焼き魚を想い出すようになったのである。「姥捨」が伝説の世界に埋没したように、生きながら焼き魚になる話も、別の世界の物語になってほしいものである。

8月7日早朝、太田川河口にて小船から



(後記)

原爆からの放射能の2次障害も大きいですが、灼熱の火の玉からの熱線による1次障害の火傷も市民を酷く痛めつけた。

水の中の魚を焼くのであるから、直接熱線に曝された人は肌の奥まで焼かれたのである。だから市内で見かけた被爆者の火傷の肌の悲惨な状態には今でも絶句させられる。

水の中の魚もただ漂っていたが、地上の被爆者も何かを求めて迷い歩いて、そしてその果てに力尽きたのであろう。

死因は典型的な二次放射能障害による白血病

(週間とちょう「8月15日終戦記念日特集, 1988年8月8日」)

八月十五日午後の広島駅は、原爆負傷者や行方不明の家族を探す群集で混雑していた。

夏の太陽が、すでに焼け野が原となった各所で焼かれる死臭を、一層息苦しく照りつけている。かろうじて動き始めた鉄道に乗り込むために、人々は争ってうごめいていた。

正午に重大放送があるとのことであったが、原爆負傷者収容所となった、郊外の小学校の講堂で聞いたラジオは、感度も悪く軍国主義で育てられた十七歳の私には、とても理解できないものであった。

「無条件降伏」とか「敗戦」という断定的な表現はなく、それでいて勝利とは反対の局面を迎えたくらいしか分からない。

同級生に出くわしたのはそのような状態で、駅前でもみあっていたときであった。

「やあ、負けてしまうな」

Mは、あっさりといつてのけた。そうか、やっぱりあの放送はそういう内容だったのかと、呆然とした顔にMは晴々とつけ加えた。

「これで、俺たちはもう心配なくていいぜ」

私は頭をなぐられたくらい驚いた。苦戦よりも敗戦、敗戦よりも占領されることの方が、生活しやすいとは到底考え及ばなかったのである。

重傷の母を探し出し、半年に及んだ原爆後遺症からも回復し始めたころ、無傷で元気に活躍していると耳にしていたMの死を知った。

死因は典型的な二次放射能障害による白血病とのことであった。

私などよりはるかに戦争の本質を見抜いていたことを初めてさらけだして、彼の未来への大きな期待をこめた晴々としたその表情と声が、真夏の太陽のもとで毎年必ず思い出されるのである。

* * * * *

(後記)

このように元気で無傷の人が次々に亡くなった。

母を探す私を励ましてくれた友人も、無傷であるがゆえに、懸命にひとを励まし助けて走り回った挙げ句に、二次放射能障害に襲われて斃れた。

善意の者が、善意の行為のゆえに、犠牲になった。原爆は、戦いを早く終わらせたという解釈があるが、善意の犠牲者にもそう言えるのだろうか。

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚 Sirouo fish	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
-----------------------	----------------------------	------------------------------------	-------------------------	------------------------	-------------------------	------------------------



h.t.sano@parkcity.ne.jp